

平成22年4月23日現在

研究種目：基盤研究（S）

研究期間：2007～2011年

課題番号：19102001

研究課題名（和文） 美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究

研究課題名（英文） Research on Pursuit and Formation of Cultural and National Identity Focusing Constructed in Figurative Arts

研究代表者

小川 裕充（OGAWA HIROMITSU）

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：50126017

研究代表者の専門分野：東アジア絵画史
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術 文化 国家 自己同一性

1. 研究計画の概要

本研究は、「美術に即した文化的・国家的自己同一性」が、美術の制度のみではなく、その造形性を踏まえて、追求・形成されることを明らかにしようとするものである。現在は、美術の三分野に即して、絵画・彫刻・建築三班に分かれ、各班の中で海外調査を合同、あるいは単独で行う分班と、個人研究を単独で行う分班とに分かれる。分班が単独で行う絵画班では第一班や建築班、合同で行う彫刻第一班・第二班が、それぞれ上記目的の前提となる、実作品の包括的な海外調査を進めており、各分野で膨大な画像資料や文献資料を集積しつつある。本研究は、既存の画像資料や文献資料に、今回の調査で得られるそれを加えて、より包括的に造形作品それ自体に当たり、絵画・彫刻・建築三分野の造形表現の何が、例えば、中国絵画なら中国絵画という造形作品に共通に見出し得るのか。それを解明して行くことにより、作品表現をなおざりにした制度論ではなく、制度論を踏まえて上で、表現論を研究課題である「美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究」の基軸に位置づけようとするものである。

2. 研究の進捗状況

研究の進捗状況は、個人研究については、内外の美術の造形性の何が、文化的・国家的な自己同一性の追求・形成の要因となるのかの一斑は、「5. 代表的な研究成果」として挙げた7点のうち、地平線を設定することが、中国絵画としての自己同一性の根幹をなすことを明らかにする④小川「五代・北宋絵画的透視遠近法—中国伝統絵画的規範」、オーストラリア人アイデンティティーをハイデ

ルベルク派などの「国民絵画」に見出す⑤田中「オーストラリア人アイデンティティーと「国民絵画」や、「睢陽五老図巻」を北宋文人の自己同一性の表象と捉える⑥板倉「睢陽五老図像の成立と展開—北宋知識分子的絵画表象」、『ミイラージ・ナーメ』を絵画表現により、イランの国家的自己同一性の表象と再解釈する⑦榎屋“The Mi’radj-nâma Reconsidered”など4件により示される。

一方、海外調査については、多岐に亘るので、絵画第一班のみに絞ると、この3年間での調査撮影点数は、国内・国外調査（アメリカ・カナダ調査、ヨーロッパ調査、アメリカ補充調査）合わせて4147点。4年前までの調査撮影点数は、国内・国外（東南アジア・オーストラリア）合わせて1712点、総計5886点に上り、残る2年間の調査期間で6千点を超えるのは確実であるから、既刊の『中国絵画総合図録』約1万点、『同 続編』約5千点に、本研究の成果を踏まえて近い将来刊行される『同 三編』6千点余を加えると、合計2万1千点を遙かに超える。これは、中国の公私コレクションの書画約2万点を収載する『中国古代書画図目』の絵画点数を遙かに凌ぐ。それに台北故宮博物院所蔵書画約4千点を収載する『故宮書画図録』を加えると、中国と台北故宮を除く、他の全域を対象とする『中国絵画総合図録』シリーズと相俟って、全世界の中国絵画を概観できるようになり、本研究はより大きな基盤を踏まえて推進することが可能となる。

3. 現在までの達成度

本研究課題の達成度は、「①当初の計画以上に進展している」と考える。何故なら、上

述のとおり、「美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究」の基盤は、シンガポールのみを対象とする萌芽研究から韓国・台湾・香港などを対象とする基盤研究(A)を経て、全世界を対象とする本基盤研究(S)に至るまで、足かけ十年に亘る国内外の連続調査により、絵画・彫刻・建築の3分野で着実に拡大してきたからであり、研究代表者の立場から言うと、「2研究の進捗状況」で述べたとおり、制度的なものではなく、造形的なものに則った個人研究が行われており、調査研究・個人研究ともに、現在までの3年間で、当初計画を遙かに超える進展を見ることができたからである。

個人研究の場合、当初は、次の2年間、あるいは研究計画終了後ぐらいにならないと成果が出て来ないと予想していたにもかかわらず、これまでの3年間で既に各研究者の専門に即した業績が挙がり、調査研究の場合は、今回、撮影料の問題で『中国絵画総合図録』『同 続編』には収載されてはこなかったボストン美術館の優品約千点を加えることが可能となり、当初予定には入っていなかった優品千点を加えて、研究基盤をより一層充実させることができたからである。

4. 今後の研究の推進方策

先ず、これまでの実作品の調査研究による画像資料と文献資料の集積に、これからの2年間のそれを加える。この3年間の調査撮影で既に集積した資料は、絵画班について言えば、現時点での点数は、上記のとおり、合計4174点であり、さらにこれからの2年間、調査研究を続けつつ、近い将来、全ての成果の整理を終える。その前後の適当な時点で、画像資料の分析・研究に入り、より多数の作品に共通するより普遍的な造形性の発見に努める。例えば、小川が見出した、中国五代・北宋時代以後の作品に通有の地平線の存在がそれであり、以後の作品の規範となり、中国画家の中国画家としての自己同一性の根幹となる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計22件)

① 朴亨國、「ベトナム・チャーキュウ出土リソグ祭壇基壇部の連続説話場面に対する新解釈」、『佛教藝術』、佛教藝術学会、毎日新聞社、(有査読)、303号、pp.3-7、13-40、2009年。

② 西上実、「須磨コレクションの形成と記録性」、『中国近代絵画研究者国際交流集会論文集』、京都国立博物館、(無査読)、161-170頁、2009年。

③ Shoichi Ota，“Modernization by the

Monarch: Architectural Transition in Royal Capitals in Indochina,” *Proceedings of Whose EA-International Conference on East Asian Architectural Culture*, Whose EA, (有査読), pp. Chapter IV 209-215, 2009.

④ 小川裕充、「五代・北宋絵画的透視遠近法—中国伝統絵画的規範」、『開創典範：北宋的藝術与文化研討会論文集』、台北：国立故宫博物院、(無査読)、139-175頁、2008年。

⑤ 田中秀隆、「オーストラリア人アイデンティティと「国民絵画」—コモンウェルス大会を前にしたメルボルンを窓として—」、『美術に即した文化的・国家的自己同一性の追求・形成の研究—東南アジアから全アジアへ』(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基礎基盤(A))研究成果報告書)、(無査読)、75-85頁、2008年。

⑥ 板倉聖哲、「睢陽五老図像の成立と開展—北宋知識分子的絵画表象」、『開創典範：北宋的藝術与文化研討会論文集』、台北：国立故宫博物院、(無査読)、325-345頁、2008年。

⑦ Masuya, Tomoko，“The Mi’radj-nāma Reconsidered,” L. Komaroff and J. Kerner eds., *Festschrift for Prof. Soucek, Artibus Asiae*, 67-1, (有査読), pp. 39-54, 2007.

[学会発表] (計2件)

① 小川裕充、「五代・北宋絵画的透視遠近法—中国伝統絵画的規範」、開創典範：北宋的藝術与文化研討会、2007年2月5日、台北：国立故宫博物院。

② 板倉聖哲、「睢陽五老図像の成立と開展—北宋知識分子的絵画表象」、開創典範：北宋的藝術与文化研討会、2007年2月5日、台北：国立故宫博物院。

[図書] (計2件)

① 小川裕充、『臥遊—中国山水画 その世界』、2008年、総438頁。

② 田中秀隆、思文閣出版、『近代茶道の歴史社会学』、2007年、総444頁。

[その他]

ホーム・ページ

<http://cpdb.ioc.u-tokyo.ac.jp/>